

岡部 健 (1950~2012)

治らない病をかかる人々のために在宅緩和ケアの道を開いた。

「在宅緩和ケアの岡部健先生」と聞いて、ああうちの家族もお世話になった、という読者もいらっしゃるだろう。健さんが住み慣れた自宅で最期を迎えるために、専門の在宅診療所を開いたのは1997年のことだった。当時はまだがんになっても病名を本人に告げないことさえある時代だったから、患者自身が自分の死を見つめ延命治療ではない選択ができる態勢がつくられたことは、画期的なことだった。

もともとは呼吸器の外科医として出発し、約20年間手術に明け暮れる毎日だったという。切って命を救うことに邁進する仕事ぶりに、疑問を投げかけたのは2人の患者だった。「いい加減に人口呼吸器を外してくれ、自然に逝きたい」と言い放ち、1週間ほどで亡くなった戦争体験のある男性。「家に帰って子供と過ごしたい」と懇願し、自宅で息を引き取った若いお母さん。患者には延命よりはるかに強く死の迎え方への欲求があることを知り、最後はおだやかに家で過ごすのが一番いいと確信した健さんは、外科医の道を捨てることを決意する。

おしゃべりで議論好きでにぎやかな人の輪の中にいた健さんと対照的に夫人のいく子さんは物静かで無口。それだけに夫を見る目は冷静で、こう評する。「私に相談なく決めただけれど、やりたいことをやりたいようにやりたいだけやる人だったから」

最初の診療所は元美容院を改装した賃貸物件。検査機器はなし。掘りごたつのある部屋で患者の話を聞き、医師、看護師、ケアマネージャー、保健士などによるチームケアを実践し、年間300人もの看取りを行った。そのかたわら、いく子さんを伴い車を運転して、遠くは四国、北海道へと講演に出かけた。「外科医のときから毎晩飲んで午前様。家でゆっくりしていたのは二日酔いのときだけ(笑)」というから、車中は夫婦で過ごす貴重なひとときだったんだろう。

ある日、疲れてソファで横になっていた夫の蒼白の顔に、いく子さんは愕然とする。検査を受けると、すでに胃、脾臓、肝臓にがんが広がっていた。医者の不養生というが一切の健診を受けたことがなく、手術後もタバコをやめなかつたというのだから豪放な人となりがうかがえる。半年後にはさらに転移が見つかり、奇しくも、自らが死に向かう一人の患者としてスタッフのケアを受けながら、終末期医療をさらに深めていくことになった。

病状の進む多くの患者が口にする「お迎え」の話に安らかな死のありようを感じ、一方で闇に下りるような死への不安を実感した健さんは、在宅の現場で宗教的なケアをする“臨床宗教師”を構想し、その養成を模索し始めた。知り合った若い僧侶、高橋悦堂さんに「死んでいく自分をしっかりと見よ」とその可能性を託しながら。ジャーナリストの奥野修司さんには、衰弱する体で自分の生涯を語り尽くし、それは死後1冊の本にまとめられた。そうした言動からは自分の死さえ社会にさらし在宅ケアの実験場にしようとした意思が伝わってくる。この本をもとに、のちに『まだ見ぬ夢に向かって—岡部健医師の半生を綴った物語』という映画が制作された。

健さんは「カミさんといるのが一番楽なんだ」ともらしていたらしい。疾走するように生きた健さんは、いく子さんが手を合わせるリビングの仏壇で、今ようやく静かに安らいでいるのかもしれない。享年62歳。

参考文献 奥野修司著
『看取り先生の遺言 がんで安らかな最期を迎えるために』文藝春秋



(取材・文／西大立目祥子)

墓地は西6-1区

西大立目 祥子(にしおおたちめ・しょうこ)
フリーライター。街歩きガイドなどもつとめる。
著書に『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)など。